慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	経済学上より観たる動物の生活と人類の生活(人類特有の道具分業及び階級別)
Sub Title	
Author	河上, 肇
Publisher	三田学会
Publication year	1913
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.7, No.2 (1913. 4) ,p.217(1)- 287(71)
JaLC DOI	10.14991/001.19130422-0001
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19130422-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

廣告主へ御注文の向は三田學會雜誌廣告に依る旨御附記を望む

營業御案内

徽章賞牌　其他美術金屬各種

金銀木盃　七寶

期日正確、技術精巧、品質純良、價格低廉

右之通御注文に應じ調製上納申上可く候間多少に不拘御用命の程伏て奉願上候

諸官省
各學校　御用

東京市麹町區飯田町三丁目十番地
日本帝國徽章商會
鈴木梅吉
電話番町　八百五十七番

三田學會雜誌　第七卷第二號

論說

經濟學より觀たる動物の生活と人類の生活

（人類特有の道具分業及び階級別）

河上肇

目次

一、動物の生活狀態――其一、技術的方面
二、動物の生活狀態――其二、精神的方面
三、幼稚なる人類の生活狀態――其一、技術的方面
四、幼稚なる人類の生活狀態――其二、精神的方面
五、人類特有の道具製造の能力
六、道具製造能力發生の原因及び意義
七、道具と人類特有の生產力
經濟學より觀たる動物の生活と人類の生活

八、動物社會の分業と階級別
九、道具と人類特有の分業
一〇、道具と人類特有の階級別

茲に掲ぐる所の一論は、余が年來の宿論に屬するものである。從つてこれまで、既に機に觸れ折に臨んで、略論を試みたることもあり、自ら一二重複を免れざる記事もあれど、是等は切に讀者の寛恕を仰ぐ。幸に多くの誌面を汚すの許可を得たれば、坐右に控へ置きし若干の材料は略ぼ提供し盡すを得、聊か立論の基礎を鞏固にし得たるを悅べど、只だ遺憾なるは、急に原稿徵發の命に接したるを以て、論を盡すに充分の餘裕を得ず、爲めに叙述に精にして論議に粗なるの缺點あるを免れざりしことである。而して余が特に之を言ふ所以は議論の筋が聊か所謂危險思想に類似する所ありて、一部の人の曲解を招くの虞あるが爲めである。若し何等かの非難ありたらば、請ふ他日を期して更に大に論せん。

一、動物の生活狀態——其一、技術的方面

動物の經濟は、普通に吾人が想像し居るよりも、遙に著き進歩を爲し居るに反し、幼稚なる人類の經濟は、普通に吾人が想像し居るよりも、却て遙に幼稚なる狀態に在るものである。余は、人類經濟の特徵を明かにするの前提として、先づ此事より述べて見やうと思ふ。

多くの動物が、人類と同じやうに、狩獵及び漁撈に從事しつゝあることは、言を俟たざる所なるが、彼等の中、其の進歩したる者に至りては、一種の牧畜及び工藝を營みつゝある者がある。話の順序として、先づ其の一二の例を擧げやう。

例へば、蟻は其の食物を獲んが爲めに、蚜蟲及び介殼蟲を利用することあるものにて、彼等は、是等蟲類の群中を走行しつゝ、其の觸角を以て之を打ち、かくして其の腹部末端より露の如き液を分泌せしめ、之を奪ひ去る譯なるが、猶ほ時として彼等は是等の昆蟲を飼養し又は育成することが有る。例へば彼等は上部を覆へる通路に依りて導かるゝ土室を以て是等の昆蟲を被覆し、以て其の逃亡を防ぎつゝあるを見る。又た進みては、是等昆蟲類の卵を採集し、之を己が巢に貯へ己の卵に施すと同一の注意を以て之を育成しつゝあるものも有る。尤も是等の昆蟲は、何れも蟻の保護なきも生活し得る者なれども、其外、蟻の巢には其れ以外の所に曾て發

見されたる事なき他の昆蟲を發見することが有る。是等のものは、つまり蟻の保護なくしては生活し得ざる昆蟲故純然たる蟻の家畜と謂ふべきであるが、是等は多くは甲蟲にて、彼等は蟻に依りて種々の介抱を受け、之に依つて其の生活を維持し、子孫を繁殖しつゝある。即ち蟻は是等甲蟲の身體を掃除し、又た之に向つて口移しに食餌を與へ、若し其巣が亂された場合には、已等の卵に對すると同等の注意を加へて、是等の家畜を避難せしむる。而して是等の甲蟲は、蟻の最も嗜好する分泌液を供給するものにて、蟻は其液を欲しゝと思ふ時は、之に近いて之を溫和に撫で、又は何等かの方法を以て、好意を表はす。然る時は、甲蟲は其の腹部に有する叢毛の尖端より液を分泌するものにて、蟻は急いで之を甜め去ると云ふことである。猶ほ以上述ぶる如き家畜の飼養は、必しも同じ種類の凡ての蟻の間に行はれ居るに非ずして、縱ひ種類は同じきものに在りても、謂はゞ文明の程度如何に依つて、直に之を殺して食用に供し、全く家畜として飼養するの術を知らざるものあることは、特に注意すべき事である。

蟻の中には又た其の食物に種々の加工を爲し、謂はゞ一種の工藝を營み居るものも有る。例へば Atta barbara と云ふ種類の蟻は、秋の末に種々の植物の種子を蒐集して來るのであるが、其の穀倉は直徑三寸五六分、高さ一寸内外にして、其數は凡そ數百に上ると云ふことと故、之に貯藏し得る食物は何百匁と云ふ程の分量に達する譯なるが、扨て彼等が是等の食物を收納し終る時は、次いで數週間其の發芽作用を妨ぐる爲めに、何等かの方法を採る。如何なる方法を取るやは分明ならざれども、兎も角何等かの方法を取れることは、其蟻を離し置く時、是等の種子の發芽する時に依つて知らるると云ふことである。而して、其後一定の時期來り、愈々之を消費する時となれば、彼等は、初めて其の種子をば自然の發育に一任する。すると、種子の表皮破れ、幼根生じ、莖も亦た發し、かくて種子の内に在る澱粉は化學作用を起して、種子の養分を作る爲めに一種の糖分を作る譯であるが、此點まで進むと、蟻は其根を切り莖を剪みて、種子の發育を中止せしめ、然る後、晴天の日を待つて之を地上に持ち出し、乾燥して後再び之を穀倉に收め、此の如くにして之を冬期の食料に充つと云ふ。

同く Arta 屬に屬するもので葉切り蟻 leaf-cutting ant と稱せらるゝ者は、非常に多數

のものが相集り群を成して生活する者であるが、彼等は地下に極めて深く巣を穿ち、發掘せる土を以て垤を造る。其垤は時として直徑三四十尺に及ぶものがある。而して彼等は、其巣より諸方面に向つて、附近の植物に通ずる墜道又は道路を設けるので、或る學者は、彼等が其巣より半哩を距てし地に於いて働きつゝあるを實見したと云ふ。彼等が主として攻擊するは植物の葉で、卽ち彼等は、其葉より稍々圓形を成せる小片を咬切り、或は自ら之を其巣に運搬し、或は之を橋上に落下して他の蟻をして運搬せしむる。其害は實に甚きものにて、彼等にして一たび繁殖せば、「オレンジ」、「コーヒー」等の栽培は全く不可能と爲ると云ふ。而して彼等は、此の如くにして採集せる葉を如何なる用途に供じつゝあるかと云ふに、彼等は其葉の上に一種の菌を培養し、之を其の食餌と爲す譯である。卽ち彼等が其の咬切れる葉片を揑ねて海綿の如き塊と爲す時は、一種の菌が漸次其上に發生して來る。彼等は此菌を純粹に培養せんが爲め、力めて之に混ずる他の生物を除去し、又た此菌の分枝を摘みて其の結實を妨げ、常に之をして生育狀態を保たしむる。而して彼等が此の如き複雜なる方法を盡して得んとするものは、此菌の菌絲の尖端の膨大せる部分で、此の部分は極めて液汁に富み、彼等の最も重要なる食物と爲るものであるが、此菌は彼等の巣以外には曾て發見されたること無きもので、謂はゞ彼等社會の特產物だと云ふことである。

以上述べたる如き事實を以て動物社會に於ける工藝の一種とするは、或は不穩當なるの議を免れざるべきか、進みて之を動物の住居に徵すれば彼等の社會に於いて明かに工藝の行はれつゝあるを知るに足るのである。思ふに多くの動物が巣を作るの能力を具へ居ることは、殆ど言ふを俟たざる所なれども、今ま其中にて、最も進歩し居れりと思ふものを擧ぐれば次の如き例がある。

南亞弗利加に居る或る種類の鳥は(Frédéric Houssay, The Industries of Animals, p. 190. et seq, 挿畫參照)、一定の場所に多勢集りて一の村落を作り、合力に依つて其の住家を作る。一村落に集る者の數は、少くとも二百羽以上、多きは五百羽に達す。

彼等は先づ草を取り來り、之を以て樹の幹より枝に掛けて、傘を擴げたる形に傾斜した大きな屋根を作り、如何に雨降るとも水の漏れざるやうに設備する。此の屋根は村落の鳥の共有に屬するものであるが、既に此の屋根の出來上つた後は、次

で一對宛の家族が各々其の私有の住家をば屋根の下に構へる。是等の巣は、其の入口、皆な下に向つて垂る。而して相互の間は非常に密接し居る故、一見する時は個々別々の物と見へ難いと云ふことである。其の私有の巣は、同族の繁殖するに從つて次第に殖える譯であるが、遂に蔽ひの下に餘地が無くなると、今度は一部分のものが分離して他へ移住し、其處に又た新たなる殖民地を作ること、恰も往昔ギリシヤ人ヴ[illegible]ニシア人等の殖民せし狀態に髣髴たるものが有ると云ふ。

多くの鳥が織物の術を解し居ることは敢て珍からぬことであるが、茲に Orthotomus longicauda と云へる鳥の如きは、更に進んで裁縫の術を解して居る。此鳥は巣を作るに當つて、先づ樹の葉の大なるものを選び、其嘴にて葉の兩側の緣に穴を順々に明け行き、然る後、絲をば其穴に交替に通じて之を袋の形に縫ひ、其中に毛とか綿とか云ふ材料を集めて、之を巣に作るのである。而して其絲は如何にして作るかと云ふに、其の主なる材料は蜘蛛の網とか綿とか云ふ類のもので、之を嘴にて絲に紡ぐのである。されば、此鳥は紡績の術をも解し居るものと云ふて、差支なき次第である。

又た或る種類の鳥には、氣候の變化に應じて其巣を作る方法を異にするものがある。これは彼等の巣を作ると云ふ技術が、其種に固有する所の本能にのみ本かざるの證據と爲るもので、注意すべき現象である。例へば Loxiataenioptrera と云ふ鳥は、フランスでは夏冬共に同樣の巣を作るけれども、スウェーデンの如き寒國に於いては、夏と冬とに依つて其の構造を異にするので、卽ち冬期には其巣の壁を非常に厚くし、且つ其の入口を極めて小さく作れども、夏期に於いては正に之と反對である。又た Baltimore oriole と云ふ鳥は北亞米利加の北方にも南方にも住んで居るものであるが、南方の溫き場處に於いては、其巣をば極めて疎く作つて空氣の流通を自由ならしめ、且つ其の材料としては少しも溫かさうな物を用ひざる上に、其の入口は之を西に向けて成るべく強い光線を避けるやうに拵へてあるが、北方の寒地に住める者の巣は全く之と反對で、入口は南方に向けて成るべく光線の射し込む時間を多くしてある上に、壁は極めて之を厚くし、且つ其の內部には種々の暖かさうな材料が用ひてある。

更に進んで蟻及び之に類似せる昆蟲を見ると、其の工藝上の進歩には驚くべき

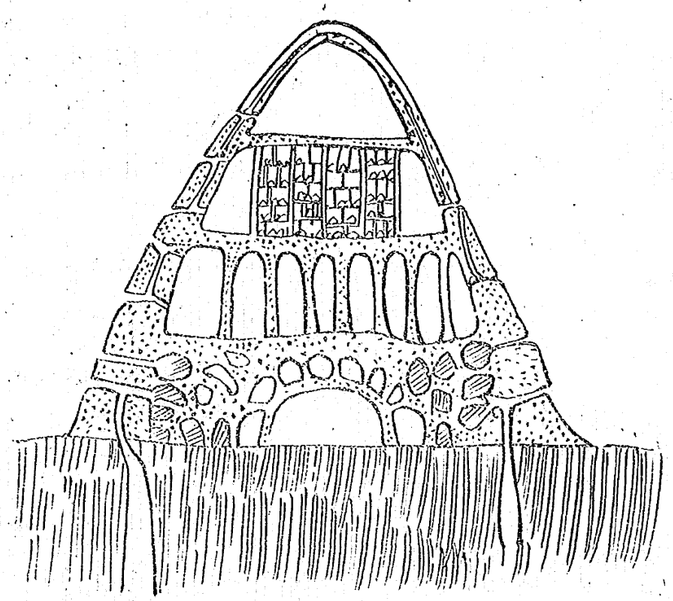
ものがある。例へばTermiteと云ふ昆蟲は、普通は白蟻 White antと呼ばれ居るも、實は眞の蟻とは全く異れる別種の昆蟲なるが、此種の昆蟲には、極めて精巧且つ巨大なる住家を築造するものがある。即ち亞弗利加及び濠洲の諸地方に在つては、其巣は六尺乃至十尺、稀には一丈八尺乃至二丈の高さに達するものがあつて、之を彼等の身長に比ぶれば、約其の千倍に上る譯である。此の巨大なる營造物は、土壤に排泄物を混じ且つ分泌液の作用にて堅き粘土質と爲れるものより成り、其形は「ピラミッド」狀、圓柱狀、塔狀等種々ある。其の内部には多數の房室及び通路等あり、猶ほ地下にも隧道を設け、時としては巣より數十間の距離まで延長されて居る。

此の白蟻の中にて最も發達し居るものはTermes bellicosusと云ふ種類のものであるが、今ま前掲Houssayの著書に據り、其の建築の一斑を述ぶれば次の如くである。(挿畫參照)此の白蟻の建築は、外部は粘土の壁で圍繞されて居る。其壁の厚さは、土地に接近せる部分は、二尺より二尺五六寸に達して居る。壁は非常に堅くて恰も煉化石の如くなり居る故、他の獸類之に踞するとあるも、曾て破壞されたる事なしと云ふ。壁を通じて二種の通路がある。一は横に貫けるもので、これは外部と

交通する爲めの道路である。二は壁の中を底の方より頂上に向つて縱に貫けるもので、之は其壁を作る時、通行の爲めに設けたもので、壁を作つた後は、壁が破損して之を修復する場合の外は、平生は全く使用せぬものである。而して其の縱の通路は、壁の下の方に近つく部分が非常に廣くなつて、更に地下三尺乃至一丈五六尺の深さに達して居る。之は元と壁土を取る爲めに作りたる穴なれども、壁の出來たる後は、降雨の際に排水の用を爲さしむる爲め、其のまゝにしてあるのである。次に建物の内部に入つて見ると、總體四階から成つて居る。其の中の一階には、中央に女王及び王の部屋がある。女王及び王は其の部屋の中央に位し、之を圍繞して約二千許りの兵蟻及び職蟻が居る。此室の壁は特に堅固であつて、且つ其の周圍には空氣の流通の爲めに窓を設け、猶ほ出入口が設けてある。是等の出入口は、普通の蟻には通行自在であるが、女王は姙娠後、卵の成熟するに從ふて、其の腹部が非常に膨脹するが爲め、最早や一生を通じて外部に出づる能はざるものである。Folsom, Entomology, with reference to its biological and economic aspect (邦譯あり)に記載する所に依れば、女王の生殖力は驚くべきもので、時としては一分間に六十の割合を以

て卵を産むと云ふ。此の如くにして女王は專ら産卵に從事し、文字通りに國母であるが、王は始終其傍に居りて之が看護をして居る。女王及び王の身體を掃除し、

白蟻の建築



Houssay, the Industries of Animals, P. 212.

且つ之に食物を供給するのは、凡て他の職蟻の任務とする所である。而して此の女王及び王の部屋を中心として、其の周圍にも多數の部屋を設け、之を職蟻等の住室に充て、更に其の外側には多數の室を設けて、之を食物貯藏の場處として居る。次に二階は全く使用せざる部屋で、室内には何の仕切りもなく只だ丈夫なる粘土の柱があつて天床を支へて居るだけである。矢張り外部に向つては窓を設け、其窓に依つて空氣の流通を充分ならしめてある。此の二階は謂はゞ空氣の貯藏庫とも云ふべきもので、之に依つて空氣の流通を計るのみならず、併せて氣溫の激變を妨げることに爲つて居るのである。次に三階は謂はゞ育兒室にて、女王が卵を産む毎に、職蟻は之を大切に抱へて此の三階に持ち來る。室内は粘土の壁に依りて縱に若干の室に分たれ、更に木片又は「ゴム」を以て横に若干の小房に分たれ、茲に卵が安置されてある。而して此の小房に限り粘土を用ひあらざるは、成るべく熱を傳導せざる材料を選べる譯にて、卽ち室内の氣溫を成るべく均等に保ち、之に依りて卵の成育に害なからしむるの趣意である。最後に四階は全く空虛であるが、之は矢張り三階の溫度を均等に保つ爲めに、屋根を高くして空氣を入れ置き、之に

依つて太陽の熱の直接の影響を防ぐることにしてあるのである。

二、動物の生活狀態——其二、精神的方面

扨て以上述べたる所は、主として動物社會に於ける經濟上の技術的方面のことであるが、更に其の精神的方面に就いて見るに、彼等の間には能く將來のことを慮るの能力を有するものがある。此事は前に蟻のことなど述べし際、既に多少は之に言及したれども、今ま改めて其他の二三の例に就いて述べんに、例へば栗鼠の如きは、秋季其の食物の豐富なる時に當つて、木の穴を見付け又は土中に穴を掘り、之に果實を貯藏して、之を冬季の消費に充てつゝある。又たシベリア及びハンガリー地方の野鼠にて Psammomys なるものは冬季の消費に供ずる爲め土地を掘りて其の食料を貯藏するのであるが、其の貯藏の分量は一匹に就いて約二斗に達すと云ふ。又た同く鼠の一種にてシベリア地方に居る所の Arvicola economus なるものは、其名の示す如く頗る經濟的の動物である。彼等は約四寸足らずの小動物なれども、夏季より秋季にかけ、物の根を掘りて約十五「キログラム」(一「キログラム」は

約二百六十七匁の食料を貯藏するのである。彼等は如何にして其の食料を貯藏するかと云ふに、先づ樹の根の周圍に小さなる穴を掘りて根を切り取り、次で無用の土を除き去り、更に運搬に都合好きやう之を短く切り、然る後之を一片宛口に銜へ後退(アトスザリ)して自分の住家に持ち還るのである。其の住家は土地の下に拵へありて、中に枯草を敷けり。其の住家よりは、込み入りたる通路更に四方に通ず。而して其の通路を辿り行く時は、遂に其の倉庫に達する譯にて、其の倉庫の數は三個乃至四個あり、各々四「キログラム」又は五「キログラム」(一「キログラム」は約二百六十七匁)の食料を貯ふるに足りて居る。彼等は此の如くにして、冬期降雪の際と雖も優に其の生活を安樂に維持し得る次第なるが、只だ彼等の恐るゝ所は人間にて、卽ち土人は冬期食物の缺乏するに當つては、此鼠の巢を掘り、其の貯藏したるものを取りて食ふ譯である。

更に鳥類に就いて同じやうなる例を擧ぐるならば、木啄の一種に屬する Colaptes mexicanus なるものはメキシコに居る鳥にて、平生は昆蟲及び果實を以て其の常食と爲すものなれども、同地方にては夏期に至らば是等の食料は絶對に無くなる故、豫

め春の中より之を準備し置くの必要があるのであるが、彼等は特に腐敗の虞なき槲の實を選んで之に充つるのである。彼等が其の貯藏器として利用するものは、龍舌蘭の花を持ちたる幹なり。其幹の長さは、六七尺より一丈に達するものなるが、花稠みたる後は、其幹の皮は太陽に照され乾燥して固くなると同時に、中の液は全く無くなりて、立派なる管と爲るのである。彼等が其の貯藏の爲めに利用する譯である　彼等は先づ其幹の下部に穴を設け、其穴よりして槲の實を一個宛入れ、底の方が一杯に充ちたる時は、今度は又た其の上部に穴を明け、之よりして再び槲の實を詰め込み、此の如くにして管の全部に槲の實を詰め終るのである。何故此の如く多くの穴を明くるやと云ふに、それは管の所々に狹くなれる場所ありて、頂上より入れたゞけでは、途中で塞るの虞あるが爲めである。此の如くにして彼等は夏期の食料に差支を見ざる譯であるが、彼等が他の時期に食用に供するものと、貯藏の爲めに用ふるものと、其の選を異にするが如きは、最も注意すべき現象である。

猶ほ動物の中には其子の爲めに遺產を作るものが少くない。Necrophorus なる

甲蟲は、屍肉を食料と爲し居るものにて小獸、鳥、蛙等の屍體は皆な彼等の好物であるが、彼等は之を發見するも、己れ自身の爲めに用ふる場合には彼等は、何等の工夫を爲すことなく直に其の場處に於いて食ふのである。從て他の昆蟲も多勢來集して之を食ふのであるが、彼等は別に之を意とするの樣子が無い。乍併、此の如き多勢の競爭者あることは、其の仔蟲の爲めには頗る困難の事情であるから、彼等は其點を慮り、仔蟲の爲めには特に之を地中に埋め置くのである。即ち彼等にして鼠なり小鳥なりの屍體を發見したる時は、三匹乃至四匹のものが共同して其の屍體の下に辷り込み、非常なる活動を以て盛に土を掘る。是が爲め、約二時間もすると、屍體は略ぼ一尺ほどの深さに埋まることに爲る。そこで彼等は、其上に掘り返へしたる土を掛け、表面を平にして置く。此の如くにして屍體を埋め終りたる後、雌蟲は再び土中に入り、屍體の上に卵み付く。されば仔蟲は、產れ出づるや否や直に豐富なる食料を眼前に發見するのみならず、其の食料は恰も消化し易き程度に腐蝕して居る譯である。猶も屍體を埋めんとする折、若し土地が堅くて掘り難い場合には、彼等は土地の軟かなる他の場處に之を運び行くのであるが、若し近き場

處に斯かる適當なる土地なき折は、彼等は自ら之を食ひ、更に他の場處に移つて貯藏用の食料を發見するのである。

又た或る昆蟲の如きは、以上述べたるよりも更に一歩を進めて、他の昆蟲を捕獲し、生きたるまゝ之を己が仔蟲の爲めに貯藏し置くものがある。例へば胡蜂(ヤマバチ)の一種で Sphex と云ふものは、九月に其卵を產むのであるが、彼等は是が爲め十二の穴を土中に掘る。而して其の一箇宛に向つて、彼等は約三箇月の勞働を費すのであるが、今ま其の工作の模樣を詳く云ふならば、先づ横に二吋(インチ)乃至三吋の長さを有する洞道を作り、然る後之を斜に曲げて更に地下三吋位の處まで同樣の洞道を作り其の末端に三箇又は四箇の部屋を作る。而して其の各々の部屋に一箇宛の卵を產み付くるのであるが、是等の部屋は同時に作るので無くて、先づ其の一個のものが出來上りたる時は、之に一定の食料を貯へて卵を產み付け、然る後其室と洞道との間を閉塞し、此の如くにして第二、第三又は第四の部屋の仕事を順々に終へ、一々之を閉塞し、然る後地上に出でゝ更に入口を塞ぎ、何者にも氣付かれざるやう其の場處を平坦にして置くのである。次に彼等が其卵の傍に貯藏し置く所の食料に付いて述べんに、其の食料に充つる所のものは、蟋蟀で、卵一箇宛に付いて四匹宛之を備へ付けるのである。彼等は卵を產む爲めの室を作りたる後は、他方に飛び行きて此の蟋蟀を捕へ、非常なる困難を經て之を持ち還るのである。而して其の持ち還りたる蟋蟀は、一見する時は既に死せるものゝ如くであるが、實は蜂の爲めに毒を注射されて一種の痲痺狀態に置かれたもので、恰も植物の種子の如く全く、何等の活動をも爲さぬけれども、而かも死んで居るのでは無い。此の如くにして彼等は其の蟋蟀を地中の穴に持ち込み、其の胸部に卵を產み付け、且つ尻端の針を以て蟋蟀の肉に穴を穿つて置くのである。されば仔蟲は產れ落ちたる時より生きた蟋蟀の肉を食料とすることが出來、親の穿ち置きたる穴より段々と蟋蟀の肉に喰ひ込み、かくて前後四匹の蟋蟀を喰ひ了つた後、始めて地上に出でゝ獨立の生活を爲すに至るものである。

(註)以上動物の生活狀態を記述するに就き參考せし著述の主なるものは次の如くである。

1. Frédéric Houssay, the Industries of Animals.
2. Folsom, Entomology, with Reference to its Biological and Economic Aspect. (三宅、內田兩氏譯フオルソム氏昆蟲學)

3. Wasmann, Modern Biology, and the Theory of Evolution.
4 Fabre, the Life and Love of the Insect.

三、幼稚なる人類の生活狀態——其一、技術的方面

以上述べし如く、動物の中には、之を技術上より云へば狩獵漁撈は勿論、一種の牧畜又は工藝を勞むの能力を具ふる者がある。而して之を精神上より云へば、啻に現在のことのみならず、遠き將來のことをも慮るの能力を具ふる者がある。然るに今ま之を人類と比較するに、幼稚なる人類は是等の點に就き、却て彼等の或者よりも劣り居るものゝ如く、現に、之を今日存在せる野蠻人又は近時まで存在せし野蠻人の狀態に徵するに、其の生活の幼稚なること寧ろ驚くべきものがある。

例へばオーストラリアの土人(註一)に就いての記事の大意に曰く

『其の野蠻たる、若し文明なる語にして假に用ゐ得べきものとせば、彼等は人類文明の最下等の程度に在るものと謂ふべきもので、卽ち彼等は、家屋は勿論泥小屋さへも建てず、纔に草葉を集めて風露を凌ぎ居るばかりである。勿論土地の耕作、穀物の栽培を爲すことなく、食物は食ひ得べきものならば殆ど何物をも選ぶ

ことなく、卽ち草木の根及び果實を始めとし、蟲ならば甲蟲、蟋蟀及び白蟲の類をも食ひ、猶ほ其外、大小の鳥獸及び人を食ふ。「ボート」も作らず、刳舟も作らず、纔に有加利樹(eucalyptus)の樹皮を組み合せて之が代用として居るだけである。彼等は毫も衣服を用ゐず、又た裝飾物も殆ど之を用ふることなく只だ鼻梁に骨を通し、又は粗末なる貝殼の首飾を掛け、且つ皮膚に彩色を施す位のことである。彼等は二又は三以上の數詞を有せず、從つて彼等の間には文字なく、學問なく、藝術も宗教も亦た在るべき筈が無い。』(註二)

同く中央オーストラリアの土人に關する記事に曰く

『是等種族の何れに就いて云ふも、嚴格に云へば、衣服と謂ふべきもの、卽ち身體の何れかの部分を蔽ひ又は寒暑を避くる爲めの物は、殆ど無い。……多くの地方に於いては、「カンガルー」及び「ウォラビー」「カンガルー」の小なるもの)澤山に居れども、衣服の目的に是等動物の皮を利用ずと云ふことは、彼等の全く解せざる所である。……土人は寒氣を感ずること鋭く而してマクドンネル山脈の地方に在りては、氣溫氷點以下に降ることが屢々であるが、此の如き冬の夜には

彼等は火を焚き其の傍で身を震はして居る。唯一の蔽ひは、婦人の着用せる小さなる前掛やうのもの及び男子が儀式の際に用うる總(フサ)である。總の大さは種族に依つて非常の差異があるが、南方の種族——the Arunata, Luritja, Kaitish——に在つては、一般に小さくて、蔽ひとしては全く用をなさぬものである。……之と等しく、婦人用の前掛も、其の大さは種族に依つて非常に差異があるが、南方の種族よりも北方の種族の方が大きくて、且つ常用とせらるゝ傾きがある。少女は一定の年齢に達し、アトナ、アリルタ、クマタ、と稱す儀式を經た後で無ければ、斯かる前掛を用うることを許されぬ。』(註三)(註四)

又たMalayo—Polynesianに關する記事に曰く

『South Sea Islandsの多くの地方に於いては、陶器を作ることと又は食物を鍋に入れ火にて煮ると云ふことは、全く知られて居らぬ。土人の大部分は全く石器時代のもので、金屬に就いては何等の知識も有つて居らぬ。Tahiti(太平洋の一孤島)に於いては甘蔗生ずるも、土人は只だ之を嚙むのみで、砂糖を作る技術は全く知つて居らぬ。綿も亦た自然に成長するが、彼等は之を何の用にも供しない。アジアを距る遠き島々の大部分に於いては、織物の技術さへも解されて居らぬ。』(註五)

又たブッシュメン(Bushmen)に關する記事に曰く

『彼等は時として數日間食物なくして過ぐることが有る。然るに斯かる場合に若し何等かの食物を發見せんか、彼等は直に之を貪り食ふので、例へば斑驢(シマウマ)の如きは、五人のものが、二時間の中に、其の全部を食ひ盡すと云ふ勢である。彼等の武器は弓と毒矢で、彼等の衣服は野獸の皮毛である。彼等は洞穴(ホラアナ)又は巖窟(イハヤ)を住居とし、或はbosjeの篠葉を圓く曲げて作れる一種の巢を以て其の住居として居る。』(註六)

(註一)オーストラリアの土人は、初めて發見せられたる折は、約十五萬の人口を有せしが、今は雜種を併せて二萬二千位の人口に過ぎぬ。

(註二)Keane, The World's People, 1908, p. 45.

(註三)B. Spencer and F. I. Gillen, The Northern Tribes of Central Australia 1904, p. 583 et seq.

(註四)衣服の有無は必しも文野の度をトするの標準と爲らず。これは土地に依りて氣候に寒暖の差が有る爲めである。併、茲に引く所のオーストラリアの土人は、氷點以下

の寒地に住みながら衣服を用ゐぬのであるから、熱帶地方の土人が裸體で居るのとは、全く事情を異にして居る。

(註五) Tylor, Researches into the Early History of Mankind, 1865, p. 178.

(註六) Kaem, The World's Boople, 1908 pp. 142, 143

四、幼稚なる人類の生活狀態——其二、精神的方面

抑々衣食住は人間の生活に缺くべからざるものゝ如く考へられ居れど、以上述ぶる所に依つて見れば、人類の中には、衣服なく、住居なく、且つ其の食物の如きも殆ど自然のまゝのものを攝取するに止る者あることを知るに足るのである。然るに之を動物の生活狀態に徵すれば、彼等の中には、或は宏壯なる住家を建築し、或は其の食物を得るが爲め種々の加工を爲すものあること等、既に述べたる如くである。されば是等は、幼稚なる人類の思ひの外に野蠻なるを發見すると同時に、禽獸昆蟲輩の文明の思ひの外に進歩し居るを發見する次第である。併し古來人間は萬物の靈長と稱されて居る。されば縱ひ其の物質的生活は如何に憐れなりとも、其の精神的生活に至つては或は大に見るべきものがあるのでは無い乎。曰く、否。

吾等は野蠻人の精神的方面を見るに及んで、其の更に幼稚なるを發見して驚くの外ないのである。

蓋し幼稚なる人類は、只だ現在あるを知つて將來を知らない。此事は、彼等の生活を研究せし諸家の異口同音に唱ふる所である。シェープェル曰く『原始人類は只だ現在に生活するのみ』と。(註一)ブューヘル曰く『彼等は只だ現在に就いて思考するのみ』と(註二)ズペンサー曰く『蠻人社會に在つては、慾望あらば直ちに其の充足起る』と。(註三)又たウェスターマークは曰く『蠻人の間に於いては、勞働に對する殆ど唯一の誘因は、必要か然らずんば强制である』と。(註四)更にワイッの曰く『目前の必要にして事足らば其の肉體的及び精神的努力は直ちに休止す』と。(註五)而して是等諸家の論斷の誤ならざることは、次に掲ぐる諸例に依つて明かである。

(註一) Schaefer, "Die Zeit als Wirtschaftselement," Zeitschrift für Socialwissenschaft, IX, S. 747.

(註二) Bücher, Entstehung der Volkswirtschaft, 6 Aufl., S. 14.

(註三) "Each desire as it arises discharges itself in action before counter-desire have been awakend." —— Spencer, Principles of Sociology, vol. I, § 31.

(註四) "Man is naturally inclined to idleness, not because he is averse from muscular activity as such, but because he dislikes

the monotony of regular labour and the mental exertion it implies. In general he is induced to work only by some special n otive which makes him think the trouble worth his while. .....Among savages, who have little care for the morrow, who have few comforts of life to provide for, and whose property is often of such a kind as to prevent any great accumulation of it, almost the sole inducement to industry is either necessity or compulsion.'' — Westermarck, The Origin and Development of the Moral Ideas, 1908, vol, II, p. 268.

(註五)''No sooner has he supplied his pressing necessities, than his physical and mental efforts cease.... ....Indolence and thoughtlessness, in an incredible degree, are characteristics of perfectly uneducated human beings.'' ——Dr. Theodor Waitz, Introduction to Anthropology, 1863, pp. 289.

例へばアフリカ中部の土人に關する記事に曰く

『彼等ほど太平無事の人間は復たと無い。彼等は曾て過去を回想して悔むことも無く、又た曾て將來を豫想して憂へたことも無い。』

『將來と云ふことは、彼等にとつて全く用なきことである。彼等は毫も將來に就いて考ふることなく、若し年老いて働く能はざるに至らば、彼等は救助なく、餘財なく、只飢餓と慘苦の裡に往生を遂ぐるのみである。』(註一)

又た前に述べたるブッシュマン(アフリカ南部の土人)に關する記事に曰く

『彼等は殆ど先見の明を缺くのみならず、又た自制の力も無い。凡ての感情、凡ての慾望に對し、彼等は直ちに之に從ふを知るのみで、其の結果如何は彼等の毫も顧慮する所で無い。彼等は小兒の如く、只だ現在に向つて生活するのみである。』(註二)

又曰く

『彼等の無智なる、實に驚くべきものがある。彼等海上に於いて颶風に遭ひ沈沒の虞ある時は、妻子を水中に放擲して顧みざるの狀、宛ら弊履を棄つるが如くである。彼等は元來神と云ふ觀念を有せざれば、彼等が此の如く妻子を棄つるは、所謂獻神の犧牲に出づるに非ずして、全く一時の沈沒を防がんが爲めである。彼等の行爲が發作的本能的たるは、凡て此の如くである。』(註三)

同くアフリカの土人ピグミー族(Pygmies)に關する記事に曰く

『彼等には何等の貯蓄物が無い。祖先より傳ふるものも無く、又た子孫に遺すものも無い。一日の要は一日の勞で支へられて居る。』(註四)

又たアフリカ東部の土人に關する記事に曰く

『彼等は其の觀察せし所よりして、何等利益ある結論を作り能はぬ。彼等の精神作用は感覺の範圍外に出づる能はず、又た現在の事物外に出づる能はざるものである。』(註五)

更にベーッはブラシルのインド人に就き觀察して曰く

『余の信ずる所に據れば、彼等は其の日常の物質的缺乏に直接關係あることの外は、全く考ふる所なきものである。』(註六)

又た南米の諸蠻族に關する記事に曰く

『長くとも一日以上に向つて食料を處有するが如きは、彼等本來の性質に反する。』(註七)

(註一) Dowd, The Negro Races, Vol, I, p. 376.
(註二) *Ibid* vol. I, p. 47.
(註三) Kaene, Ethnology, 1901 p. 48.
(註四) Dowd, *Ibid*, Vol, I, p. 13.
(註五) Spencer, The Principles of Sociology, Vol. I, 79.
(註六) Richter, a. a. O., S. 18.
(註七) Spencer, *Ibid*, Vol, 1, p. 80.

余は先きに動物の生活狀態を述べし際、彼等の間には、或は翌年の食料を貯蓄し、或は己の子の爲めに食料を貯藏するものあることを指摘した。然るに幼稚なる人類が只だ現在の一瞬時に生活するものなることは、實に以上述べしが如くである。猶ほ蜂や蟻の非常なる勤勉に至つては人の能く知る所であるが、更に之を野蠻人の生活に徵するに彼等は眼前の必要に迫まれざる限り、決して勞働することを無きものにて、其の怠惰なる誠に驚くべきものがある。

例へばアフリカの土人に關する記事に曰く

『多少の例外はあれども、遊惰はアフリカ人の共有の特質である。ゴールド、コーストのニグローに就きボスマンの云へる所に依れば、極めて必要なる事柄に非ざれば、彼等をして勞働せしむるに至らず』と云ふことである。』(註一)

『彼等もし僅に二日間の食料だに得ることあらば、彼等は乃ち小舍の内に蓆を敷き、煙草を喫しつゝ、半ば睡眠に耽つて日を暮らすが常である。』(註二)

『彼等は極めて必要にして、而かも一擧手一投足の勞に過ぎざることも、愈々其の必要に迫まらるゝまでは、出來得るだけ之を猶豫せんとするものゝ如く卽ち夜

に入らば、水を酌み又は薪を採るの必要あるは明白のことたるに拘らず、晝間は只だ徒に怠惰に耽り、日暮るゝも猶ほ驚くことなく、漸く日沒後又は夜に入りて後始めて其の必要とする水を酌み又は薪を採る。』(註三)

又たオーストラリアの土人に關する記事に曰く

『彼等は狩獵、漁撈、戰鬪、舞踏其他苟くも直接の報酬ある見込ある場合には、何時でも熱心に働く。乍併、將來の利益を得ることを目的とする所の Prolonged labour は彼等の好まざる所である。』(註四)

又た Neighberry Hills に住めるトーダ人(Todas)は

『事情已むを得ざる場合の外は一分(リンイガーダ)たりとも動かぬ。』(註五)

又たナマクア人(Namaquas)に關する記事に曰く

『彼等は一擧手一投足の勞を吝まざれば、優に其の生活を維持し得る土地に住みながら、終日太陽の下には暖曝(ヒータング)を爲しつゝ、無頓着に怠惰に耽りつゝあるが爲め、往々にして飢餓に襲はれ、殆ど絶滅せんとすることがある。而かも人ありて勞働を勸むれば、吾等如何でか地上の蟲の如く營々たるを得んや (Why should we resemble the Worms of the ground?)と答ふ。』(註六)

ビル人(Bhils)は

『勞働は之を輕蔑し且つ嫌惡し、働くよりも半ば飢ゑて居る方が好いとして居る。』(註七)

又たメキシコの土人は

『二日の勞働に依つて一週日の食料が得らるゝならば、他の五日は遊んで暮らすのが普通である。』(註八)

(註一) Westermarck, The Origin and Development of the Moral Ideas, Vol. II, p. 270.

(註二) Dowd, *Ibid* Vol, I. p. 877.

(註三) Bücher, a. a. O., S. 20.

(註四) Westermarck, *Ibid*, Vol, p. II. 269. Spencer, *Ibid* Vol, I, § 34.

(註五) Westermarck, *Ibid*, Vol, II, p.270. 猶ほスペンサーは彼等の生活を評して indolent and slothful であるとして居る。(Spencer *Ibid*, Vol, I, § 34)

(註六) Westermarck, *Ibid*, Vol. II, p. 271.

(註七) Spencer, *Ibid*, Vol, I, § 34.

(註八) Gurevitsch, " Die Entwicklung der menschlichen Bedürfnisse. " Sinals=mal Socialwissnschaftliche Forschung, XIX,

事情此の如くであるから、幼稚なる人類は將來のことを慮りて豫め之に備ふると云ふことなく、從つて極めて僅なる一二の物を除かば、彼等には殆ど貯蓄物なるものが無い。スペンサー曰く Beyond the few rude appliances ministering to bodily wants and decorations, the primitive man has nothing to accumulate. と(註一)誠に氏の言の如くである。

今ま試に其の一二の例を述べんに、例へば前に擧げたる南亞の土人ブッシュマンに就いて或人(Farini)の實見したる所に據れば

『嘗て二人のブッシュマンあり、日沒の時一匹の羚羊を捕へしに、彼等は則ち其處に坐して其肉を啖ひ、翌晝、骨の外何物をも殘さゞるに至つて、始めて其處を去つた』と云ふことである。(註二)されば彼等の生活は『常に饗宴か然らずんば飢饉』(Always either a feast or famine)と云ふ有樣である。(註三)又たヒリッピンのネグリト人に關する記事に曰く

『彼等もし狩獵に出でゝ鹿又は野猪を殺すことあらんか、彼等は其獸の倒れたる所に止り、穴を地中に掘りて之に獸屍を入れ、後ち火を起し、各人各々其の好む所に從つて其肉を割き、火に炙りて之を啖ふ。啖ふて腹滿つれば則ち其處に眠り、眠より覺むれば復た同一事を繰り返へし、かくて其肉を食ひ盡したる後、彼等は始めて相携へて復た狩獵に赴くのである。』(註四)

(註一) Spencer, *Ibid* Vol, I, s 34.

(註二) Dowd, *Ibid*, Vol, I, p. 31. 此の記事は嘗て拙著『人類原始の生活』に引用の際、其の一節を誤譯したり。今ま再び原文を參照して之を訂正し置く。

(註三) Spencer, *Ibid*.

(註四) Bücher, a. a. O, Aufl.1, S. 10. 何故か第六版には此の一節の記事が削除してある。

五、人類特有の道具製造の能力

以上述ぶる所に依つて考ふれば、幼稚なる人類の經濟は、之を技術的方面より云ふも亦た精神的方面より云ふも、進歩せる或種の動物の經濟に比して、遙に劣り居るものなることを知るに足る。然らば人類は、畢竟經濟上に於いて毫も動物に優る所なきかと云ふに、必しもさうでは無い。蓋し吾人の見る所に依れば、如何なる動物も、曾て道具を製造し得るものなきに反し、如何なる人類も亦た曾て道具を製

造し得ざる者は無い。而して此點が、人類と他の動物との經濟上に於ける唯一の差異で、人類の經濟が他の動物の經濟と著く其選を異にするに至つたのも、亦た全く此點に在ると信ずる。

尤も或る意味に於いては、多くの動物は皆な一定の道具、例へば翼、牙、爪等を有して居て、且つ是等の道具は、動物に依つては、實に著き發達を爲せる者がある。例へば地質學上の所謂中生代に於いて、旺盛を極めたる蜥蜴類の如き、其の空中を飛揚せしものゝ中には巨大なる翼を有せしものがあつて、殊に「プテラノドン」と稱せらるる種類の如きは、其翼を擴げなば殆ど三間半の長さに達するほどのもので、今日最大の飛ぶ鳥なる南米の「コンドル」鷲に比べて、殆ど三倍の大さであると云ふ。猶ほ此の蜥蜴の中、陸上を匍匐するものに在つては、頗る巨大の體軀を具へたものであつて、現に南米で發見された「アトラントサウス」と云ふものゝ如きは、身長十六間ありて、今日の最大の鯨よりも更に大であると云ふ。其の具へし脚なり尾なりの如何に有力なるものなりしかは、之を以ても推し知ることが出來る。又た第三期に於いて旺盛を致せし獸類の中にも、頗る巨大の武器を具へたものが少くないので、

例へば、「ヂノテリウム」と稱する象の如きは、其の頭骨のみにても長さ一間に近く、「マケロッス」と云へる虎には、牙の大さ殆ど短刀に近きものがあつたと云ふ。(註一)乍併、是等の道具は、一定の生物的組織體の一部を構成するもので、其の生體より分離して獨立の存在を爲し得るもので無いから、經濟學上道具と稱すべきものでは無い。又た蟻の如き昆蟲類に在つては、既に述べし如く家畜を有するものがあり、或は奴隷を有するものもある。而して是等の家畜なり道具なりは、前に述べたる所の牙や爪などゝ違ひ、之を利用しつゝある生物から、分離して獨立の生存を爲しつつあるもので、吾々人間の利用しつゝある機械の類と殆ど異る所なきが如くであるが併かし家畜なり奴隷なりは、其れ自身が一の生物であるから、是れ亦た經濟學上道具と稱すべきものでは無い。然るに之と異り、人類と最も類似の生理的構造を有する動物、例へば類人猿の如きに至つては、或は樹枝を以て防禦の具と爲し、或は石片を以て殼果を割出する等のことをも爲す。而してダーヰンの記載する所に依れば(註二)、ロンドンに於ける動物園の猿の如きは、殼果割出の用に供せし石片は、使用後必ず之を藁堆の下に隱し置き、決して他の猿に之を使用せしめないと云

ふことであるが、今ま是等の場合に於ける樹枝乃至石片は、其の道具たることに於いて疑ない。されば道具の使用乃至所有は、必しも人類特有の現象と謂へぬけれども、而かも是等の動物に在つては、只だ自然物をば道具として使用するだけであつて、其の自然物に加工して道具そのものを製造することは出來ぬのであるから、畢竟道具製造の能力を具ふるは、獨り人類のみに限ると謂はなければ爲らぬ。猶ほ翻つて之を人類に徴するに、其の現存せる者に在りては、如何に野蠻のものと雖も曾て道具製造の能力を具へざる者なく、又た之を古代に遡つて考ふるに、地質學上如何に古き時代に屬する地層と雖も、苟くも人類の遺骨の發見せらるゝ地層に在つては、必ず其の遺物たる石器を發見するのである。されば道具の製造は、人類以外の動物の全く解し能はざる所たると同時に、又た凡ての人類に共通する所の特有の能力である。思ふに人類と然らざるものを分つ標準は、見地の如何に依つて種々あるで有らう。乍併、之を經濟上より云へば、道具製造能力の有無、これが其の唯一の標準であると吾人が主張するのは、畢竟上述の如き理由あるに本く。(註三)

(註一)丘博士、進化と人生、四一三頁以下。

(註二) Darwin, Descent of Man, Vol. I, p. 125.

(註三) フランクリンが人間を呼んで tool-making animal (道具を製造する動物)と云つたのは、經濟上に於ける人間の定義としては誠に遺憾なきものである。而してかのオツペンハイマーが Der Mensch wird Mensch, weil er das "werkzeugmachende Tier," das tool-making animal ist とか又は Das Mensch ist das Zeugmacheude Tier などゝ云つて居るのも——(Franz Oppenheimer, Theorie der Reinen und Politischer Oekonomie, 1910. S 26 u. S. 93.)——(或はカウツキーが With the Production of the means of production the animal man begins to become the human man などと云つて居るのも——(Karl Kautsky, Ethik und Materialistische Geschichtsauffassung. 英譯は Ethics and Materialistic Conception of History と云ひ、一九〇七年の出版である。今ま玆に引く所の文句は、英譯書の一二〇頁に在る。猶ほ此書には邦譯がある。それは堺利彦氏の筆に成つたもので、題名は不思議に改惡されて『社會主義倫理學』と爲つて居る。)——凡て同じ趣旨に本くものである。猶ほツヰンケルは Der Mensch hat zwischen sich und die Thierwelt das Werkzeug gesetzt と云ひ(福田博士國民經濟原論、註八九)、シエーフヱルは Der Urmensch erhebt sich schon dadurch uber das Tier, dass er die Gegenwart mit eigenen und don von der Vergangenheit aufgesparten Geraton und sonstigen Hilfsmitteln besser anzunutzen weiss と云ふ(Zeitschrift fur Sozialwissenschaft, IX S. 747.) 又た福田博士は『唯其の(原始人類の)獸類と異る所は、食料探索に當つて極めて幼稚なる器具を用ゐるといふことと是である』と云つて居られるが(前掲書、八八、八九頁)、道具を使用するものは、既に動物の中にもあることあれと故、是等の說は不充分であると謂はなければ爲らぬ。此點は既にカウツキー

の指摘して居る所であつて、現に彼は明白に Not the use of tools distinguishes man from the animals. What, however, alone distinguishes the former is the production of tools. (*Ibid.* eng. trans. p. 120.) と述べて居る。

六、道具製造能力發生の原因及び意義

今ま何が故に人類特有の現象として道具製造の能力なるもの起りしかと云ふに、其の原因は之を生物學上の事情に歸しなければ爲らぬ。蓋し人類が道具製造の能力を具ふるに至りし前提條件は、そが四足獸の域を脱し、其の二脚を以て直立するに至りしことである。元來人類は裸體にして毛を有せず、甲を有せず、皮膚は甚だ薄弱にして物に觸るれば忽ち破れて血を出すのみならず、其齒と云ひ爪と云ひ何れも皆な脆弱で、武器としては殆ど物の用に立たぬものであるが、殊に其の二脚を以て直立すと云ふことは大に身體の不安定を招きしもので、是が爲め動もすれば前に躓き後に倒るゝの虞あるに至つたのであるが、而かも此の二脚を以て直立するに至りしことの爲めに、彼等は始めて自由なる手を有するに至りたるのみならず、腦髓を身體の中心に置くことに依りて始めて其の充分なる發達を遂げ、かくて其の發達せる腦髓の作用に依りて自由なる手を利用し、遂に從前他の動物の曾て爲し得ざりし所の道具の製造なるものを發明するに至つたのである。

然らば此の道具製造能力の發生なるものは、經濟上果して如何なる意味を有するやと云ふに、人類は之に依つて始めて一の資本財 Capital goods (又は生產財 Production goods 間接財 indirect goods, 高級財 goods of a superior degree.) の製造を爲し得るに至つたので、詳く云へば、他の財を生產する爲めの手段と爲る所の財を製造し得るに至つたので、此點より云へば、人類の經濟は他の凡ての動物の經濟に比し、一段高度の發展階段に在るものと云ひ得らるゝのである。

尤も前にも云ふ如く、人類以外の動物にも、家畜又は奴隷を利用し居るものありて、是等は矢張り一の資本財に外ならざるものなれども、其の相違する點は、是等の家畜なり奴隷なりは一の生物にして、自由に之を製造すること能はざるもの故、只だ之を養育して利用し得るに止ると云ふ點である。即ち人種は資本財を製造することを得れども、――而して製造されたる資本財が即ち廣義の道具である――他の動物は、縱ひ家畜又は奴隷をば一の資本財と爲し居るものに在つても、單に之

を養育し利用し得るに止るのである。然るに此事は、資本財の發達の上に極めて重大なる關係を有する事柄である。蓋し家畜奴隷等は皆な生物なるが故に、其の進化發展は所謂自然的器官 Natural organ の變化に依つてのみ始めて行はるゝものであるが、扨て是等器官の變化は、人間が自由に物を製造し得る場合と異り、極めて緩漫なる速度に於いて始めて生じ得るのみならず、其の變化には大凡そ一定の制限あるを免れざるものである。何故かと云ふに、是等の器官は所謂 morphologagical conditions に於いてこそ變化するを得れ、所謂 physiological conditions に於いては全く、變化するを得ざるが爲めである。例へば、吾々が馬や豚を飼ふ場合に於いても、次第に人爲淘汰を施して、或は馬の脚を長くし、或は豚の胴を太くすることは出來る。しかし馬を變じて豚となし、豚を變じて馬となすことは出來ぬ。此の如く、是等生物の進化發展は、其の速度及び範圍に、自ら一定の制限あるを免れざるものである。然るに之に反し、人間の製造する所の資本財なるものは、無生物に加工して得たる產物なるが故に、之が改良進歩を圖ることは毫も生物學上の法則に依つて制限を受くることなく、人智の進歩に伴ふて殆ど其の窮極する所を知らざるものである。

されば道具製造能力の發生及び發達の原因は、元と生物學上の事實に在るものなれども、道具製造能力の發生及び發達そのものは、人類獨特の經濟の發生及び發達の根本原因として、最も注意すべき經濟學上の事實である。

七、道具と人類特有の生產力

仍て吾人は、更に進んで、其の道具の發展が人類の歷史に及ぼしたる影響に就き、之を分析して觀察せんに、第一に、道具の發展は人類の生產力をば、他の動物社會には見るを得べからざる程度に增進せしむるの根本原因と爲つたものであり、第二には道具の發展は人類の社會組織、詳く云へば其の分業及び階級の別をば、他の動物社會には見るを得べからざる方面に發達せしむるの根本原因と爲つたものである。此の中、第一の生產力の發展に就いては、特に說明を要せざることながら、只だ論述の順序として其の一班を述べんに、例へば一八八七年に於ける英國鐵道の貨物運送量は二億六千九百萬噸であるが、假に貨物一哩一噸の運賃を一片として、同年の鐵道收入より其の運送密度を計算するならば、總計八十九億六千二百萬噸

哩と爲る。卽ち八十九億六千二百萬噸の貨物を一哩宛運送した計算に爲る。之が汽車と云ふ機械――道具の發展したるもの――の運送力の一例であるが、扨てこれだけの貨物をば斯かる道具なくして運送するとしたならば、其の結果は如何で有らうか。余は先きに、動物社會にも家畜を所有する者あることを述べ、且つ是等の家畜は所謂道具に非ざることをも指摘して置いた。仍て茲には、汽車てふ道具の代りに、馬てふ家畜を用ふるものとして考へ見んに、先づ馬一頭が一日に一噸の貨物を十哩運送し得るものと假定し、更に一ヶ年間三百日だけ働き得るものと假定せば馬一頭は一ヶ年の中に一哩に就き三千噸の貨物を運送し得る計算と爲る。然らば一八八七年に英國の鐵道にて運送されたる貨物を凡て馬背にて運送するものとのせば、約三百萬(二百九十八萬六千六百六十六)の馬匹を必要とすることと爲るが、扨てこれだけの馬匹を得るが爲めには、當時英國に存在せし凡ての荷馬、凡ての乘馬及び凡ての耕作用の役馬をば盡く犧牲とせざる可らざることゝ爲る。汽車なるものゝ如何に驚くべき、道具なるかは、此の一例に依つても分る。思ふに、幼稚なる人類の經濟狀態と進歩せる動物の經濟狀態とを比較すれば、後者の寧ろ

前者に優れるの觀あるに拘はらず、人類の經濟は其後序を追つて進歩し、進歩又た進歩、殆ど其の窮極する所なく、遂にはあらゆる動物の經濟と殆んど比較すべからざる程度の進歩を實現するに至りたるは、全く其の出發の第一歩に於いて、人類が此の有力なる道具の製造を發明したるが爲めである。今ま道具の更に發展したるものを機械と云ふ。而して今の時は卽ち機械全盛の時代である。然るに翻つて我が日本の現狀を顧みれば、日常の百貨、その大半は猶ほ依然として幼稚なる道具の生產に俟つの有樣であつて、是れ軈て我が日本の經濟が、泰西諸國の其れに比して、甚き遜色あるを免れざる根本の原因である。

八、動物社會の分業と階級別

以上述ぶるが如く、道具の發展は人類の生產力をば、他の動物社會には見るを得べからざる程度に、增進せしむるの根本原因と爲つたものであるが、更に又た他方に於いては、人類の社會組織、詳く云へば、其の分業及び階級の別をば、他の動物社會には見るを得べからざる方面に發展せしめた根本原因である。請ふ少く其事を

說かん。

蓋し分業及び階級の存在は、人類社會特有の現象ではなくして、蜂、蟻等所謂社會的動物の間には、等しく分業及び階級の別を存するものである。乍併、茲に吾人の注意すべきことは、是等動物の間に於ける分業及び階級の別は、殆ど皆な生理的原因に本くものにて、決して經濟的原因に本くものに非ずと云ふことである。

例へば、蜂の王國に在りては、其の階級三に分る。其の最高の地位を占むるものは女王にして、專ら產卵のことに從事する。女王は只だ一回交尾すれば、精蟲は其の貯精囊中に三四年間(卽ち女王の一生中其の生命を保つので、女王は之れに依りて一日卽ち二十四時間毎に、約四千の卵を產むのである。其の二は雄蜂卽ちdroneにして、此の者は女王と交尾するの外は、他に何等の職務を有せざるものである。第三の職蜂は生殖器の萎縮せる雌蟲にて、此者は巢を作り、食物を集め、其の外、仔蟲の養育、幼者の哺育等社會萬般の事務を負擔して居る。此の蜂の一社會は、都合好き事情の下に於いては、頗る多數の箇體より成るもので、卽ち女王一頭、雄蜂數百頭、職蜂二萬乃至四萬頭に及ぶことがある。而して是等階級又は分業を異にせる其れ其れの蜂は、各々其の外形及び生理的構造を異にせること、次に述べる蟻の場合と同じことである。

蟻の社會に於いても、普通には雌蟻、雄蟻、職蟻の三階級がある。(之を階級と云ふは不當ならんも說明の便宜の爲め、前例に倣ふに矢張り階級と呼んで置く)。雄蟻及び雌蟻は共に翅を有し、天氣淸朗なる日には此翅を以て空中に翔飛し、群を成して交尾をする。交尾を終へたる後は、雄蟻は死滅し、雌蟻は其翅を脫落して新生活に入り、爾後數年間專ら產卵に從事する。次に職蟻と稱する者は、生殖器の發達せざる雌蟲で、此者は翅を有たない。而して無翅の職蟻は、時として更に二階級に分たれることがある。此の場合には、本來の職蟻は勞働者として一階級を成し、兵蟻卽ち軍事に從ふ者が別に一階級を成す。後者は、其の頭部及び大腮の大なるを以て、容易に前者と識別される。

猶ほ白蟻は、前に述べたる如く、蟻とは全く異る別種の昆蟲であるが、其の社會狀態は蟻の其れと殆んど同樣である。卽ち白蟻の社會に於いても、普通四階級の別がある。其中最も多數を占むる者は勞働者で、之れには雌雄の兩性あれども、其の

生殖器は發育不全で生殖を營むの能力は無い。其の代り彼等は、其の社會に於ける一切の勞働を擔當する者である。次に軍人の階級に屬する者も前者と同く生殖器の發育は不全であるが、前者に比ぶれば偉大なる頭と腮とを有し、其の職務は專ら自巳の社會を防禦するに在りて、其他の勞働には全く服しない。次は完全なる生殖器を有せる雄蟲と雌蟲であるが、彼等は何れも翅を有し、空中に群飛して交尾する。交尾を終へたる後は、雌雄共に翅を脱落して巣に隱れるのであるが、之が卽ち其の社會に於ける女王及び王と爲るもので、各々一頭宛を存するのみである。而して女王の體は、卵の熟するに從つて非常に膨脹し、殆ど運動不能と爲るのであるが、其の生殖力は實に驚くべきもので、時としては一分間六十の割合を以て產卵することがある。王は常に女王の傍に在つて、其の產卵を助けて居る。而して女王及び王とも、一切の勞働及び兵役より免れ、他の職蟻及び兵蟻の養育保護に依つて、數年間の生活を持續する譯である。

以上述ぶるが如く、動物社會にも分業及び階級の別はあれども、是等は皆な各個體の生理的差異に本き、何れも先天的宿命的性質を有すと云ふ點に於いて人間の

社會の分業及び階級の別と大に其趣を異にして居る。例へば蟻や白蟻の社會に於いて、專ら勞働に從事し居れる者は、生殖器の發育不全にして又た翅をも有せざることなれば、空中に飛翔して交尾するなど云ふことは、最初よりして彼等の解せざる所で、其故孜々として諸般の勞働に服して居るのである。然るに又た女王の如きは、身體甚だ膨大して運動不能の狀態に陷り居るもの故、勞働に從事するなど云ふことは、生理上彼等の到底爲し能はざる所で、其故他の者の勞動の結果に生活して居るのである。然るに人間社會に在つては、貴賤貧富を問はず、其の生理狀態にて敢て此の如き差異ある譯では無い。例へば勞働者と雖も、貴族と同樣に生殖能力を有して居る。若し相當の收入なき爲め己むを得ず結婚を延期して居ると云ふならば、彼等の生殖せざるは、何等生理的原因に本くに非ずして、全く經濟上の事由に本くのである。又た貴族や富豪の夫人や令孃も、其の生理的構造に於いては、車夫馬丁の妻子と別に變りは無い。尤も所謂高貴の婦人は、大厦高樓に住ひ、肥車輕車に鞭ち、其の纖手は白魚を並べたやう、そこに金も「ダイヤ」も光を添へて、固より賤民の妻女が、夏日は流汗し冬月は龜手せると、殆ど比較には爲らぬが、併し考へ

て見ると、其の貴婦人の纖手で洗濯も出來れば紡績も出來ると同時に、見苦しき賤民の妻女も亦た貴婦人同樣に子を產むの能力を具へて居るので、蟻や白蟻の社會に於ける、が如く、彼等の間に如何ともすべからざる宿命的の生理的差異がある譯では無い。斯く考へ來るならば、蜂や蟻の社會にこそ、王侯將相それ〳〵の種があるが、人間社會には、實に王侯將相何ぞ種あらんと云へぬことも無い。而して此事は、人類の歷史上、更に重要なる二個の結果を生むに至つたものである。

九、道具と人類特有の分業

第一、動物社會に於げる分業は、主として自然的器官（ナチユラル、オルガン）の差異に本いて發生せるもの故、其の分業の發達には自ら一定の制限あるを免れぬのである。固より是等動物社會に於ける分業も漸次發展するの形跡はあれど、此の如きは元と是等動物の生理的器官の變化 organic variation の結果に外ならざれば、其の發展の速度及び範圍は、自ら一定の限度あるを免れぬのである。然るに、人類社會に於いては、何等形態上の肉體的差異に本かざる分業が、益々可能且つ有利と爲り、大に分業の利益を發

揮するを得るに至つたのである。固より人類社會に於ける分業も或る程度までは各個人の生理的差異に其の根據を有して居る。例へば拔群の體格を有する者が力士（スモツトリ）になり、盲者（メクラ）が按摩に爲ると云ふが如くである。併し等く拔群の體格を有する者でも、或者が力士になるかと思へば、他の者は陸軍大將になり、又た等く盲者でも、或者が按摩になるかと思へば、他の者はフォーセットの如く學者に爲る者も有る。されば人間社會に於ける分業は、決して生理的原因にのみ本くものではない。否な、嘗てアダム、スミスの指摘したるが如く、哲學者も馬丁も生れ落ちたる時は殆ど同じ人間の子で、只だ貴賤貧富各々其の境遇を異にするが爲めに、長ずるに從ふて遂に雲泥の差異を生ずるに至るが普通である。否な其の偶然の境遇の爲めに、哲學者として生れた者が後には馬丁に爲り、馬丁として生れた者が後には車上の主人公に爲るなど云ふことも、決して稀で無いと信ずる。乍併、今ま姑く、此の如き非經濟的事業と經濟的事業との間に於ける分業の考察を舍き、專ら經濟的事業その、ものゝ上に行はるゝ分業に就いて觀察するならば、余は、人類社會に於ける分業は、主として各個人の使用せる道具の差異に本くものと信ずる。否な斯く云ひては

語弊あらん。今ま少く正確に之を換言するならば、余は、各個人の使用せる道具に種々の差異あること、これ卽ち人類社會に於ける分業の益々發展するを得る主要の原因であると信ずる。例へば或者は農具を以て土地を耕す、故に食料の生産は其者の分業に屬し、或者は汽車を以て貨物乘客を運搬す、故に運輸事業は其者の分業に屬し、又た或者は機械を以て貨物を生産す、故に貨物の製造は其者の分業に屬するが如くである。農夫なり運轉手なり職工なり、必しも其の身體(カラダ)又は手足が各各其の分擔し居れる業務に直接適應すと認むるほど、互に差異を有して居る譯では無い。皆な同じやうなる身體に、同じやうなる手足を有つて居るのであるが、只だ其の使用せる道具の差異に依つて、彼等は各々別種の働きを爲しつゝある。卽ち各個體の自然的器官は同じくとも、道具てふ人爲的器官が多種多樣にして、且つ精巧複雜と爲れるが爲めに、人々は一定の作業をば無數の仕事に分割して互に別別の仕事を分擔し、人爲を以て益々分業の應用を擴張することゝ爲り、此の如くにして人類社會には、動物社會に到底見るを得べからざる程度の細微複雜なる分業が行はれて來て、人類の生産力は今日恐ろしき程度の發展を爲しつゝある次第である。かの「ピン」製造業に關する分業は、嘗てアダム、スミスの引用する所と爲りし以來、甚だ有名であるが、今ま其の現狀を聞くに、今日に於いては「ピン」の製造たる七十二段乃至九十二段の分業に分たれ、其の結果一人の職工一日の製造高は無慮千五百萬本に上りつゝありと云ふ。此の如き細微の分業、此の如き偉大の生産力、これ皆な精巧複雜なる機械の發明を前提とするを顧みば、余が道具の進歩を以て分業發展の上に重要なる影響を及ぼすものなりと爲せる所以、恐く思ひ半ばに過ぐるで有らう。

乍併、讀者もし以上の所論を以て、猶ほ足らざる所ありと云はるゝならば、請ふ更に余をして道具の發達猶ほ甚だ幼稚なりし時代に於ける人類社會の分業が、如何に動物社會の其れと分つ所なく、殆ど全く其の生理的事情の差異に本いて行はれしに外ならざるかを、説明せしめられよ。

余の信ずる所に依れば、人類原始の團體は子の養育保護を目的とせる一對の男女より成れる一個の家族であるが、今ま此の一家族を成せる男女の間には、其の生理的差異に本いて一定の分業が行はれて居たものである。蓋し原始時代に於け

る男女間の、生理的差異如何は、今日之を審にし難きも、少くとも女子は子を產み男子は然らざるの差異ありしことは、疑ふべからざるの事實である。而して既に然りとせば、女子は姙娠分娩育兒の爲め、啻に自己の生活を維持するの必要あるのみならず、姙娠中は子を胎內に養育し出產後は又た授乳して之を養育するの必要あるよりして、彼等の體質は男子に比し、自ら脂肪多からざるを得ざると同時に、既に脂肪にして多からざるを得ずとせば其の筋肉は又た自ら充分なる發達を爲すを得ざるの理であるからして、卽ち女子は男子に比して脂肪に富み、男子は女子に比して筋肉に富むと云ふことは、恰も今日の男女間に於ける生理的差異の最も著きものたると同時に、其が又た原始時代に於ける實情であつたで有らうと考へられる。(註)既に原始時代の人類に在りても男子と女子とは先天的に此の如き生理的差異を有し、而して是等の男女は子の養育保護を目的とし、暫時相結合して一時的の家族を成し居たるものとするならば、彼等は其の共同生活に必要なる仕事を分擔するに至るのみならず、其の分業は是等男女間に於ける生理的差異を基礎とするに至るは、自然の勢である。是れ卽ち人類最古の分業であつて而して其の分業

は、個人の生理的差異を基礎とする點に於いて、他の動物社會の分業と未だ甚だ其の性質を異にするに至らざりしものである。

(註)委細は拙著『人類原始之生活』第六章人類原始の男女關係の中に詳論して置いた。

今ま試に其の分業の一班を述ぶれば、第一、男子は外に向つて猛獸及び敵人の攻擊防禦に當り、女子は內に在つて子の養育を司つたものである。第二、食料に關しては、大なる禽獸の狩獵又は魚類の捕獲は男子之を司り、女子は植物性の食料其他捕獲し易き小さなる蟲類、魚類、禽獸の探索に從事したものである。第三、此の如くにして食料の獲得は主として男子の力に俟つこと多きに反し之が調理は主として女子の司る所であつた。殊に火の利用を始めたる後に於いては、其火を絕やさぬやう注意することは、專ら女子の任務であつたと思はれる。第四、道具器具の製造に至つては、矢張り其の司る所の業の異るに從つて各々分擔されて居たと思はれる。

此事は多くの學者の異口同音に認めて居る所で、試に其の二三を引用すれば次の如くである。例へばエンゲルスは曰く

『分業は純粹に自然的に發生せるものでなく、それは元と兩性の間にのみ成立したものである。卽ち男子は戰鬪に從ひ、狩獵及び漁撈を事とし、食物の原料を獲得し、且つ是等の仕事に必要なる道具を作つた。又た女子は家を守り、食物及び衣服を調達し、料理、織物、裁縫に從事した。男女何れも自己の仕事の範圍に於いては之が主人公であつて、卽ち男子は森林に於いて、女子は家に於いて其の主人公であつた。男女何れも其の製造し且つ使用せる道具の處有主で、卽ち男子は武器、獵具及び漁具の處有主たり、女子は家具の處有主たりしものである。』(註一)

エリス曰く

『筋骨の有力なる發達を必要とする仕事、及び其の結果として精力の間歇的迸出を爲すの能力、從つて又た之に相應する所の休息の時間は、男子に屬し、子供の養育、及び竈を中心として生ずる所の各種雜多の凡ての仕事、乃至男子よりも低度の緊張に於いて、一層引續き精力を費すの必要ある仕事は、女子に屬して居た。』(註二)

又タトーマスの曰く

『人種學上の事實の敎ゆる所に依れば原始的人種の間に於いては、男子は……腕力、暴力、速力、敏巧及び先見を必要とする活動に從事し、而して緩漫なる、非瘙攣的、持續的、靜止的の仕事は、女子の負擔であつた。……男子は狩獵及び戰鬪に力を用ひ、女子は農耕及び靜止的の產業に力を用ふと云ふことは、原始社會に於いて廣く一般に行はるゝ所で、吾人は此の習慣を以て彼等の生理的差異に基くものと爲さゞるを得ぬのである。』(註三)

ウンターマン又た曰く

『男女の間に於ける性の區別は、人類社會に於いて、男女の間に於ける最初の經濟的分業に向つて基礎と爲つたものである。』(註四)

更にウエスターマークの曰く

『原始社會に於いては、男女は各々其れ自身の仕事を有せしものである。男子は家族を保護し、從つて又た其の食料を供給するの義務を有する。其の從事する所のものは、腕力及び敏捷を必要とするが如き仕事、卽ち戰鬪、狩獵、漁撈、獵具及び武器の製造等で、又た屢々樹木の伐採及び小舍の建築に從事して居る。女子は

男子の助手として其の遠征に從ひ時としては戰鬪に加はることもある、而して旅行の際、女子は荷物の運搬を司るのが普通である。乍併、女子の主たる仕事は一般に家庭的のもので、卽ち薪及び水を齎し、食物を料理し、毛皮を調へ、衣服を作り、子供を養育する。猶ほ其外、女子は家庭に向つて植物性の食物を供給するもので、卽ち草根、漿果、樹實其他のものを採集し、又た農耕を營める種類にあつては、土地の耕作は殆ど女子の仕事である。』(註五)

(註一) Engels, Der Ursprung der Familie, des Privateigenthums und des Staats, 1698. S, 164.
(註二) Ellis, Man and Woman : A Study of Human Secondary Sexual Characters. 4th ed.,1904. p. 1.
(註三) Thomas, Sex and Society, , 1907. p. 124.
(註四) Unformann, Marxian Economics, 1907. p. 48.
(註五) Westermarck, The Origin and Development of the Moral Ideas, 1906. Vol. I, p. 634.

更に此の男女間の分業に關し、二三の野蠻人に就いて其の實例を擧ぐれば、次の如くである。

オーストラリアの土人クルナイ人の或者が嘗てフイゾン(Fison, Kamilaroi and Kurnai, 1880, p. 206.)に語りし所に依れば、彼等の社會に於いては『男子は獵を爲し、魚を刺し、戰を爲し、然らずんば只だ遊んで居る』と云ふことである。(註一)

又たタスマニア人に就いてボンウッック(Bonwick, Daily Life of the Tasmanians, p. 55.)の記載せる所には、次の如き記事があると云ふ。

『彼等(タスマニアの土人の女子)は小供を養育すると云ふ必然の義務に加へて、カンガルーの獵に依つて得らるゝもの、外は、家族の爲めに凡ての食料を供給しなければ爲らぬ。卽ち彼等は丘に攀ぢ登りて袋鼠を捕へ、木片にて土を掘り芋、薯、野生の穀物、滋養ある草の根等を得、又た岩を廻りて貝を索め、海に入りて牡蠣及び魚類を捕ふ。其外、旅行の際には、彼等は彼等自ら製造したる所の籠の中に、家具を入れて之を運搬する。而して彼等の夫は、現在は用ゐなき所の樣々の槍及び戰棒等を更に其の荷物の上に加へ、猶ほ風避を作り、火を起す爲めにも、女子の助力を要求することが有る。之に加ふるに、女子は食物の調理に從事し、而して時としては、食事後、彼等の夫の食ひ殘しを以て滿足することも稀では無い。』

(註二)

又たアンダマン人(Andamanese)に關する記事(Owen, Transactions of the Ethnological

Society, New Series, vol. II, p. 36.) の大要に曰く

『男子は豚狩の爲めに藪地に出掛く、而して女子は其間飲料水及び薪を採り、貝を採り、漁網及び籠を作り、絲を紡ぎ、且つ食物を調理して男子の歸るを待つ。』(註三)

又た中部エスキモー人に關する記事 (Boas, the Central Eskimo," Annual Report Bureau of Ethnology, 1884-85, pp.579, 580.) に曰く

『男子の仕事の主たる部分は、狩獵に依り其の家族に向つて食料を供給することである。彼等は橇を驅り、犬を飼ひ、家を建て、狩獵に必要なる道具類の製造及び修繕を爲す。女子は家事、裁縫、料理を司る。即ち彼等は火の注意を爲し、「テント」及び「ボート」の覆ひの製造及び修繕を爲し、毛皮を調へ、犬の仔を育てる。又た小舍の內部の手當を爲し、土臺を平かにする等の仕事も、彼等の分擔に屬する……到る所の種族に於いて、大なる「ボート」を漕ぐのは凡て女子の仕事で、男子は只だ舵を把るだけである。又た跛者にて狩獵に從事し能はざる男子は、凡て女子と同樣の仕事をする。』(註四)

同くエスキモー人に關する記事に曰く

『彼等(エスキモー人の女子)は武器を要せざる凡ての仕事、即ち凡ての種類の物の製造、運搬及び犬の馴養に關して、男子に協力する。其外、家屋の造作、衣服の製造食物の調理等、彼等自身の仕事に專屬して居るものも甚だ多い。』

『エスキモー人の食物は、殆ど全部動物である。……是等の動物を捕獲することは、男子の義務であるが、併し一旦動物を殺した後は、其餘の仕事、即ち其の獲物を持ち歸ること、其皮を剝ぐこと、毛皮を調ふこと、肉を切り取りて之を保存し置くこと、消費の爲めに之を料理すること、其他一切の家事は、凡て女子の任務とする所である。彼等は時を定めて食事することなく、只だ飢を覺ゆる折、又は暇ある折には、何時でも食事する。女子は豫備として、料理されたる食事を携へて居る。そうして男子と共に働く時は、暇を見付けて之を皿に盛り、男子は自ら取りて之を食ひ、又は女子の手に依りて飽きるまで之を食ふ。』(註五)

又たオーストラリア中部の土人に關する記事に曰く

『若し食物にして缺乏せぬならば、男女は只だ遊惰に耽つて日を暮らし、他方小兒等は嬉々として遊び戯れて居る。若し食物を得るの必要あるならば、女子は子

供と共に木片(digging sticks and pitchis)を携へて叢林に入り、終日、蜥蜴及び袋鼠等小さなる穴居動物の探索に從事し、男子は槍、投げ槍、投道具(Boomerangs)及び楯を携へ、駝鳥、カンガルー等、大なる獲物を得んが爲めに出掛ける。』(註五)

更にTorres Straitsの西部土人に關する記事に曰く

『男事は漁撈及び戰鬪に從事し、家を建て、僅かの耕作を爲し、釣絲、魚鈎(ツリバリ)、魚扠(ヤス)及び其他の道具を作り、又た舞踏用の假面、及び髪飾乃至種々の儀式及び舞踏に用ふる凡ての裝飾品を作る。……女子は食物を調理し、耕作の大都分を司り、貝を採り、暗礁にて魚を突き、女袴、籠及び筵を作る。』(註七)

(註一) Thomas, *Ibid* p. 124. Ellis, p. 1.
(註二) Thomas, *Ibid*, p. 125. に引く所。
(註三) 同右。
(註四) Ellis, *Ibid*, p. 8.
(註五) Joyce & Thomas, Women of All Nations, vol. II, pp. 403. 404.
(註六) Spencer & Gillen, The Native Tribes of Central Australia, 1899. p. 19.
(註七) Haddon, "Ethnography of the Western Tribes of Torrens Straits" in the Journal Anthropological Institute 1890, p. 432. ―― Ellis, *Ibid*, p. 3. に引く所

以上列擧する所の四五の實例に徴するに、地方に依りて其の外界の自然的事情、殊に其の地方に存在する動植物の種類の異るが爲めに、男女に分屬せる仕事の種類は必しも一樣には爲つて居ない。乍併、茲に吾人の注意すべきことは、縱ひ其の仕事の種類は一樣ならずとするも、其の仕事の性質は略ぼ一樣にして、卽ち筋力を要すること大なる仕事は必ず男子の分擔に屬し、然らざる仕事は凡て女子の分擔に屬せしものにて、畢竟するに、原始時代に於ける男女間の分業は、專ら兩者の生理的差異に本きしものなることを知るに足りる。古人は王侯將相何ぞ種あらんやと云つたが凡そ人間あつて以來、實は男女各々其種ありで、男子は生れながらの男子、女子も亦た生れながらの女子として、今も昔も各々其の生理的構造を異にし、而して其の生理的差異に基く分業は、既に原始時代に其端を發して今日に及び居る次第である。されば今の婦人問題を論ずる者は、先づ此の由來久しき生理的差異の存在を看過すべからざる譯であるが、併しそは餘談なれば姑く舍き、只だ吾人の茲に讀者の注意を請はんとする所は、道具の發達の未だ甚だ幼稚なりし時代に於

ける人類社會の分業は、主として男女間の生理的差異に基き、其の性質は他の動物社會に於ける分業とさしたる相違なかりしものなれども、其後人類社會の分業が次第に細微を極め複雜を極め、遂に他の動物社會に於ける其れと殆ど比較すべからざる程度の發展を爲すに至りたるは、主として道具てふ人爲的器管の發展の結果に外ならぬと云ふ點である。

一〇、道具と人類特有の階級別

動物社會に於ける分業は、主として自然的器官の差異に本いて發生せるもの故、其の分業の發達には自ら一定の制限あるを免れぬのであるが、人類社會に於いては、道具てふ、人爲的器官の製造を見るに至りたる爲め、何等形態上の肉體的差異に本かざる分業が、益々可能且つ有利と爲り、大に分業の利益を發揮するを得るに至りたりと云ふことは、道具の發展が人類の社會組織(經濟的社會組織)に及ぼせる影響の第一點として、余の指摘せんと欲せし所であるが、此點に就いては以上の所論略ぼ其要を盡したりと信ずれば、余は之より進んで第二の議論に筆を移し、成るべく早く此の長編の稿を卒へやうと、思ふ

道具の發展が人類の社會組織に及ぼせる影響の第二點として、余の茲に指摘せんと欲する所は、道具發展の結果として、人類社會特有の階級別なるものが發生するに至つたと云ふことである。蓋し前述べしが如く、人類社會特有の分業は各個人の使用せる道具の差異に本くものであるが、今ま茲に述べんとする所の人類社會特有の階級別は、主として各個人の間に於ける道具處有の有無に本くものである。茲に處有と云ふは、使用又は處持と云ふと異る。現に或る道具なり機械なりを使用し又は處持し居りながら、之を處有し居らざる場合は極めて多い。處有とは處有權を有すとの意である。而して道具の未だ幼稚なりし時代に於いては、之が處持者乃至使用者は同時に之が處有者たりしものにて、殊に其の處有者にして死亡せば、死者の處有に屬せし道具は死者と共に之を墳墓に葬るの習慣さへ、久きに亘つて行はれて居たものであるが、其後土地なるものが有力なる道具となり、更に進んでは所謂『資本』なるものが一層有力なる道具と爲りしに及んで、社會には道具の處有者と非處有者との區別が截然として分れ、是が爲め人類社會には、他の動

物社會に見るを得べからざる所の階級別――經濟的原因に本く階級別――の發生を見るに至りしものである。

余は先きに動物の社會狀態を說明せし際、假に彼等の間にも階級の別あることを述べて置いた。乍併、彼等の社會には、處有者、非處有者の別ある譯に非ざれば、只だ一定の分業が行はれ居ると云ふだけのことにて、嚴格に云へば茲に謂ふが如き階級別が存在して居るのでは無い。然るに人類社會には、處有者と非處有者の區別があつて、其の極端と極端とを比較せば、一は驚くべき莫大の不勞所得を得、一は纔に其の生活を維持するだけの勞働所得に甘んじて居る。若し之を名けて等く分業と云ふならば、畢竟其の分業は遊惰と勤勞との分業である。享樂と苦痛との分業である。消費と生產との分業である。兎も角、言葉は何と立つるとも人類社會に於ける各個人の生活に著き差異あり、其の幸福に甚き懸隔あるは、否認すべからざる事實であるが、斯かる差異は他の動物社會にも等く存するとは云へ、其の原因に至つては、彼と此と大に其趣を異にし居るのであつて、其點が卽ち余の茲に指摘せんと欲する所である。

蓋し動物社會に於ける階級の別は――說明の便宜の爲め矢張り階級の別、と呼んで置くが――皆な各個體の生理的事情の差異に本くに外ならぬが爲めに、謂はば生理の本然より自然に發生せしもので、意志の强制又は權力服從の關係に本く階級の別では無い。例へば、蟻の社會に於ける兵蟻や職蜂が、空中に飛翔して交尾することの出來ぬのは强いて其の生殖欲を抑壓せる結果ではなく、彼等は最初より翅を有せず生殖器を有せずして、其の本能上何等の生殖欲を有せざるが爲めである。此の如く、彼等の生活狀態に其れ〳〵の差異あるは何れも其の自然の本能より發生せること故、そこに何等の强制もなく不平も無い。而して人類社會に於いても、道具の發展未だ幼稚なるに當つては、事情殆ど之に等しきものがあつた。余は先きに人類最古の分業は男女兩性の間に於ける分業なることを述べたが、此の如き分業は、既に說明したる如く、男女兩性の自然的生理的差異に本くもの故、エンゲルスの云へる如く rein naturwüchsig, のもので、何等意志の强制を伴ふものでは無い。男女の生活狀態は著く違つては居るが、こは一方のものがより優れたる經濟上の力を有し其力に依つて他方のものを强制抑壓するの結果では無い。從つ

て一見する時は、一方のものは他方のものに比し、比較的不幸の境遇に在るが如く見ゆる場合に於いても、其實は皆な自然の要求に出でたること故、少くとも當業者自身は之を不幸と爲し之に向つて不平不滿を抱く等のことは、決して是れなきものである。

例へば、原始時代に於いて女子の分擔に屬せる仕事は多種多樣なりし結果、女子の非常に多忙なりしは疑なけれども、其代り彼等の分擔せる仕事は皆な精力を消耗すること比較的少きものに限れるに反し、男子は一時に其の筋力を消耗し盡すが如き方面の仕事を分擔せること故、女子に比し休息の時間を要すること自ら長からざるを得ざりしものである。(註)

(註) "Primitive woman was undoubtedly very busy, but I have seen no reason to believe that she considered her condition unfortunate. (Thomas, Sex and Society, p. 127.)

又た例へば、女子は旅行に際し殆ど凡ての荷物を運搬するので、能く beast of burden (荷馬)であるなどゝ記載してあるが、之に反し、男子は武器の外は全く之を手にせざることも稀である。併し之も亦相當の理由あることにて、必しも女子が虐待

されて居る譯では無い。蓋し彼等の旅行に當つては、彼等は何時敵に襲擊せらるるやも計られず、又た猛獸毒蛇の類に遭遇することも稀ならざれば、男子は何時にても、是等不意の出來事に應酬し得るやう、常に手を空け力を貯へ居るの必要があるのである。(註一)今ま次に掲ぐる所のペルシルヱニアのインド人に關する記事は、彼等が白人と接觸したる後のことなれども、以上述ぶるが如き事情を察するに最も便宜なものである。曰く

『女子の仕事は困難又は六ケしきものでは無い。彼等は其の仕事を爲すを得又た爲すを欲しつゝあるもので、常に悅んで之に從事して居る。……彼等の主たる仕事は薪を伐りて持ち歸り、土地を耕し、穀物を蒔きて之を刈り、更に穀物を臼にて搗き粥を作り、灰にて燒きて麵麭を作ることである。彼等が其夫と旅行する時又は獵場に赴く時、若し馬を有せざる場合には、彼等は荷物を背にて運搬する。其の荷物は毛布、靴用の鹿の毛皮、釜、鉢、皿、スプーン等の臺所道具及び若干の麵麭、穀物、鹽等の食料である。是等の荷物の運搬に就き、余は曾て是等の女子が其の困難を訴へたるを聞いたことが無い。……(女子が其夫と共に狩獵に赴け(る際は)凡て

の仕事を引受け、夫をして只だ禽獸を捕獲すと云ふ重要なる仕事の外は、全く何事をも顧慮するの必要なからしむる。……蓋し男子にして、自己の仕事に加ふるに、妻の義務に屬する仕事の一部を負擔するなれば、彼等は之が爲めに疲勞し、從つて家族全體の不幸と爲るだけのことである。家族の生存は、獵夫としての夫の成效如何に掛つて居る。而して彼にして若し成效せんと欲するならば、彼は出來得る限り其腕を休め、出來得る限り困難の勞働を避け充分狩獵に從事し得るが爲め又た必然之に伴ふ困難に耐へ得るが爲め、其の必要とする所の筋力及び身體の敏捷を損せざるやう、常に注意しなければ爲らぬのである。』(註一)

(註一)此點に就いては Westermarck, The Origin and Development of the Moral Ideas, Vol. I, p. 635. に委しい說明がある。

(註二) Hachenwelder, History, Manners, and Customs of the Indian Nations, pp, 155.—58. トーマス前掲書一三〇頁以下に引く所。

此の如く原始時代の分業は皆な自然の必要に出で、其の結果は男女相互の利益と爲つたものである。故に當時の女子は抑壓强制の下に已むを得ず不幸なる生活を忍びたるには非ずして、其の分擔せる仕事の範圍に於いては獨立の權能を有し、一般に幸福なる生活を享受して居たものである。現にウェスターマークは原始時代に於ける女子の地位が決して男子に劣らざることに就き殆んど七十種の實例を擧げて居るが、(註一)今ま同書及び其の他より模型的記事の一二を引用すれば、卽ち次の如くである。

例へば北アメリカのインド人に關する記事に曰く

『インド人の女子は單に苦力(クリー)又は奴隸に過ぎざるものゝ如く、普通に考へられて居る。乍併、余の觀察せる限りに於いては、此考は全然誤謬である。……彼等は單に奴婢に非ざるのみならず、寧ろ之に反し、彼等の地位は甚だ高い。』(註二)

又たギアナのインド人に關する記事に曰く

『男子は往々「ハンモック」の中で只だ煙草を吹かして居るだけであるに、他方女子は終日勞働に從事して居る。乍併、男子が女子に向つて酷薄又は壓制の所爲を加ふることは曾て無い。』(註三)

又たコンゴーのアンドムビー人(Andombies)の間に在つては、女子は

『運搬及び一般の勞働を負擔し甚く勤勞して居るが、而かも全然幸福なる生活を

送つて居る。』(註四)

又たホッテントート人(Hottentot)に關する記事に曰く

『ホッテントート人の家庭に在りては、女子が最上の支配者で、夫は全く發言權を有つて居らぬ。公の場所に於いては男子が牛耳を執り居れども、家庭内に於いては妻の許可なくしては、桶の中より一口の牛乳をも取る能はざるほど無力である。』

(註五)

(註一) Westermarck, *Ibid*, Vol. I, pp. 638—46.

(註二) Grimel, Story of the Indian, p. 46. 前掲書六三九頁に引く所。

(註三) Ellis, Man and Woman, p. 3.

(註四) Ellis, *Ibid*, p. 4.

(註五) Hahn, The Supreme Being of the Khoi-Khoi, p. 19. ウヤスターマーク前掲書六四五頁に引く所。

以上述べる所に依つて考ふれば、道具の未だ幼稚なりし時代に於いては、男女兩性は縱ひ其の業務乃至生活狀態を異にせりとは云へ其の所謂分業なるものは、只だ相互の利益の爲めに共同の事業を分擔せるまでにて、是が爲め其間に貴賤高下の別ありしに非ざることが能く分る。是れ恰も蟻の社會に於いて、女王、王、兵蟻職

蟻等の區別ありて、其の擔任する所の事業各々相異るに拘はらず、嚴格なる意味に於ける階級は、未だ存在するに至らざるものと見るを適當とすると全く同じ事である。然るに、人類社會に於いては、自然的器官の外に道具てふ人物的の器官が出來、而して人爲的器官の發展するに從ひ、財産私有及び相續の制度と相俟つて、かの有力なる道具を所有する者と所有せざる者との懸隔が次第に甚くなり、かくて人類社會に於いては他の動物社會と異り、何等先天的生理的の優劣長短に本かざる所の人爲的經乍濟的階級の別が、生れながらにして殆んど宿命的に決定せらるゝことゝ爲つた。乍併、是等階級の別は何等生理的原因に本くものに非ざるの故を以て不利なる狀態に在る階級は、其の地位を自覺する毎に常に、社會組織に對し不平を惹起し來るを免れぬのである。思ふに此事たる、實に文化發展の途上に横はれる人類社會持有の一大障礙である。而して凡ての時代に於ける廣義の社會問題なるものは、皆な斯かる障礙あるよりして起れるものにして、且つ改革又は革命に伴ふ所謂社會問題解決の歴史なるものは、皆な斯かる障礙の歩一歩除去せらるるに至りし歴史に外ならざる者である。(二三、廿九、脱稿)